

江戸時代における“だまし”のコーティング技術

神谷 嘉美*、宮腰 哲雄*¹

1. はじめに

日本における塗装の歴史を遡れば、縄文時代にたどり着く。そうして6千年以上にも及ぶ気の遠くなるほどの時間を積み重ねながら、近代の石油化学産業の発展を経て、多種多様な塗料や塗装法が生み出されてきた。しかしながら近年「環境負荷の低減」、「自然志向」、「健康・安全」といったことから、自然系塗料への関心は高まっており、改めて天然材料が見直されている。本稿では、極めて古い時代から使用されてきた天然高分子塗料のひとつ“漆”に着目する。漆は優れた耐水性・耐久性に加えて、独特の質感を持つなどの利点から、漆工品をはじめ建築物の塗装や接着剤として広く用いられてきた。しかし原料が合成樹脂に比べて高価であり、硬化条件や漆かぶれといった扱いの難しさによって、現在では一般的な塗料と言にくいものがある。ただし漆かぶれを一般的なアレルギー反応と混同する医師も少なくないため、誤った情報が発信されることもある。漆かぶれの反応について、聖マリアンナ医科大学の中島秀喜教授によれば、漆を使い続けて身体が慣れてしまえ

ば免疫緩抑によって減少していくので、それほど心配するものではないという。一方で手間のかかる塗料として認識されてしまうのは、合成樹脂と比較して、硬化条件の細かな管理が必要となる点と下地工程の多い点に起因しているだろう。

今回紹介するのは、合成塗料のなかった時代に「いかに外観の体裁を良く」して、「工程を簡単」に「安価」な塗装を施すかという課題に取り組んだ職人のコーティング技術である。安価に大量生産を可能にする技法として用いられている方法のため、漆芸技術としての評価は低くなるが、江戸時代に使用された技法の一端を科学分析によって明らかにした事例として紹介したい。

2. 試料

本件で取りあげるのは、達磨大師像が置かれていた寛政3年(1791)製作の黒色台座の背板である。長く堂内に置かれていた像を修理するため、堂内に置かれていた達磨大師像と台座および台座から像が下された状態を図1、台座背板の正面側と裏面側を図2として示す。大師像が接して影になっていた正面側は、劣化の進行が抑えられて金色が一部残るものの汚損が激しい。寺社内という屋内で伝えられてきた漆工品は、屋外のように雨風の影響は小さいものの、堂内の灯明や護摩の油の付着、土や塵埃などが長年蓄積されることによって、塗膜表面は汚損する。しかし達磨大師像の影になっていた部分